

ハ紀元一千七百四十四年即チ吾延享元年甲子  
ノ鏤刻ニテ今ヲ距ルノ七十七年ノ古ニ在レバ  
諸曜遠距離之點及ビ行圈交於年圈之點今時ノ  
所在ヲ知ルニハ其運轉ノ數ヲ以テ推サバ大要  
ヲ失スルヲナケシ

恒星

恒星ハ其數無量ニテ游星天ノ外ニ散在シ靜居シ  
テ其位置ヲ改メス故ニコレヲ恒星ト云ヒ其繫ル  
所ノ天ヲ恒星天ト云フ其質ハ火ニノ能ク光輝ヲ  
放チ其体至大ナルヲ全ク太陽ト異ナルヲナシ但  
遠ク望ミテハ恒星トシ近キニ在リテハ太陽ト稱

スルノニ凡ク望遠鏡ヲ以テ太虚ヲ窺ル時ハ處ト  
シテ恒星ナラザルナク所謂銀河ノ如キモ四萬餘  
點ノ小恒星群集シテ一條ノ河象ヲナスナリ諦ニ  
其体質ヲ論スル時ハ每星必ズ其体ニ大小ノ別ア  
リ質ニ疎密ノ齊シカラザルヲアリテ其放ツ所ノ  
光輝ニ多少アラシ然レモ其光リ必ズ數百萬里ノ  
内ヲ照ラシコレヲ游星天ト稱シ許多ノ游星其内  
ニアリテ其恒星ヲ太陽トシテコレヲ旋回シ其游  
星ハ各一世界ニノ人畜住シ草木生スルヲ吾地球  
ニ異ナルヲナク又其游星ニ或ハ小游星アリテコ  
レヲ旋回スルヲ吾地球ニ太陰アリ土木金ノ三星

見象圖說 卷下 三十一 觀象圖說

ニ小游星アルガ如クナラン其恒星ノ發ツ所ノ光  
 輝ニ多少アリテ游星天ニ廣狹ノ別アルト游星ノ  
 体ニ大小アルトニ隨テ其數ニ多少アルヲ察ス  
 ベシ凡ソ每恒星皆大太陽ニ各屬スル所ノ游星  
 アレモ遠ク望ム時ハ一點ノ恒星ヲ見ルノミニ  
 其游星ヲ見ルヲ能ハズタトヘバ遠ク燈火ヲ見ル  
 時ハ一點ノ火光ヲ見ルノミニ燈下ノ品物ヲ辨  
 スルヲ能ハザルト其理一般ナリ故ニ吾地球ニ  
 リテハ他ノ恒星ニ屬スル游星ヲ見ルヲ能ハズ他  
 ノ恒星ニ屬スル游星中ノ人ハ吾游星ヲ見ルヲ能  
 ハザルベキナリ

恒星左旋

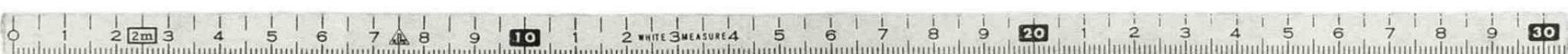
吾游星天ノ外普子ク恒星アリテコレヲ包裏スル  
 ガ如シ地球南北ノ兩極ヲ軸トシ西ヨリ東ニ向ヒ  
 自轉スルノ際地上ヨリコレヲ見レバ恒星ハ東ヨ  
 リ西ニ行クガ如シコレヲ恒星ノ左旋ト云フ但  
 其兩極ニ當ル所ノ天ノミ動ヲ見ズ北極ノ邊ニ一星  
 アリコレヲ北星ト云フコレ亦元ヨリ衆星一般ニ  
 轉動スルヲナケレモ地上ヨリ見レバ皆ナ運轉シ  
 且此星ノミ常ニ其位置ヲ守ルカ如シ然レモ其所  
 在微ク北極ヲ離ルガ故ニ測量器ヲ以テ精クコレ  
 ヲ測レバ亦一晝夜ニ一左旋スルヲ見ルナリ又

中線ニ當ル諸州ニテハ常ニ一晝夜ニシテ晝夜ノ滿天ノ星ヲ見ル然レハ兩極ニ近クニ從ヒテ晝夜ノ出沒同ジカラザルヲアリ即チ第八圖ニテ皇國京師ハ北極地ヲ出ルヲ三十五度ニシテ北方地平以上七十度ノ間ナル天ハ常ニ地上ニアリテ沒セズコレヲ恒見界ト云フ南方地平下七十度ノ間ナル天ハ常ニ地下ニアリテ出ズコレヲ恒隱界ト云フ徂中線ヲ距ルヲ南北各五十度ノ天ハ一晝夜ニシテ出沒更代ス故ニ晝ニ當ル天ナル星ハ見ルヲ得ズ夜ニ當ルノ天ナル星ヲ見ルナリ

恒星右旋

西洋ノ人ハ地球天秤宮ニ次ルノ時即チ定氣ノ春分ヲ以テ曆算ヲ起スノ初メトス支那ノ人古昔ハガ今ハ西洋ニ從ヒテ春分ヲ初トセリ地球公運シテ年圈三百六十度ヲ盡メ天秤宮ニ復ル其間三百六十五日五時四十九分ニシテ所謂四環年ナリ四環年ノ中ノ三此時本年太陽ト同經度ニ次リシ恒星ハ右旋シテ稍東ニアリ故ニ太陽四環年ノ上無時四十分四十一秒ヲ經テ周天三百六十度ノ上ニ無度五十一秒ヲ進ミテ其恒星ニ會ス其間三百六十五日六時九分ニシテ所謂運行年ナリ運行年ノ中之四第十圖ニ據リテ考フヘシ其五十一秒ハ毎年恒星右旋ノ數ニ

長崎大学附属図書館経済学部分館 武藤文庫所蔵



メコレヲ歳差ト云フ七十年ヲ經テ東ニ行ク一  
度凡ソ二萬五千九百二十年ヲ經テ三百六十度ヲ  
盡シテ元宮ニ復スコレ恒星右旋一周天ニシテコ  
レヲ大年ト云フナリ然レモコレ皆ナ視動ニノ實  
ニ轉動スルニハ非ルナリ

右ニ云フ所ノ右旋ハ視動ナレモ太陽恒星共ニ  
各自ノ公運アリテ須臾モ靜居スルナシ何ト  
ナレバ太陽既ニ自轉アルナレバ太陽自轉ノ  
タリコレト同類タル恒星モ亦自轉スヘキヲ推  
シテ知ルベシ既ニ自轉スルモノ何ヲ一處ヲ守  
リテ公運セザルノ理アラン今恒星各相距ノ

度分ヲ測ルニ古昔ノ測定スルモノト遠近ノ差  
アルモノ皆ナ其公運ニ據レリ尚詳ナルヲハ西  
洋恒星考ニ出セリ考フベシ

星座

凡ソ恒星ノ數測ルベカラスト雖モ先哲其見ルベ  
キ者ニ就テ距度相近キ者ニ三星ヨリ數十星ニ至  
ルヲ扱ヒ器械鳥獸等ノ圖象ヲ設ケ一隊トシ之ヲ  
星座ト云フ紀元前一百二十年即チ吾國開化天皇  
三十八年辛酉ニ當リテ必バ兒古斯ト云フ人樂得  
ノ地ニ生ル其人星學ヲ詳ニシ初メテ恒星一千零  
二十二星ヲ極ハメシヨリ布多祿基斯由兒派別以

及ビ地谷白刺格、傑布列爾、布林斯、方辟僧、カ、西阿兒、斯、辟々、里由斯、ナ、レド、云、ヘル、諸家、漸ク、コレヲ、增益、シテ、一千八百八十八星トナセシヲ、弗刺莫斯、的、亞、獨、名、大ニ、其精微ヲ、究メ、終ニ、三千星ヲ、定メ、以テ、此、學ヲ、大成セシガ、其後、紀元、一千七百五十四年、即チ、吾寶曆四年、甲戌ニ、當リテ、馬盧、蟄、澁、杜、人、上好ノ、望、遠鏡ヲ、以テ、南緯ノ、天ヲ、窺テ、總計、九千八百星ヲ、定、バ、タリ、今、遠鏡ヲ、假ラズシテ、見ルベキモノ、ハ、一千、八百ヨリ、二千星ニ、至ルト云ヘリ、支那ノ、人モ、亦定、ムル所ノ、星アリ、皇國ニテハ、保井春海先生此學ヲ、研究シテ、大ニ、漢說ニ、增益ス、然レ、凡、皆ナ、コレ、自意

ヲ以テ配伍スルモノナレバ西洋ト支那ト其定ムル所ノ像同ジキヲ能ハズ其コレヲ對譯スルガ如キハ初學ノ急ニアラス且小冊子ノ盡スベキニアラザレバ此ニ略セリ詳ナルハ西洋恒星考ニ就テ考フベシ

二十八宿

二十八宿ハ支那人ノ定ムル者ニシテ西說ニアラスト雖、凡、今皇國コレヲ稱スルヲ久シク耳目ノ習慣スル所ニシテ天度ヲ說ニ便ナル故此書ニ附シテ第十圖ニ出セリコレ皆ナ恒星二十八坐ノ名ニシテ每坐大小齊シカラズ度分多少アリト雖、凡、コレヲ

以テ周天ヲ東西ニ圍壅シテ三百六十度ヲ盡セリ  
 每宿ノ度分第十圖ニ出ヌガ如シ其順次ハ皆東行  
 ナス即チ次ノ如シニ於テハ  
 角 亢 氐 房 心 尾 箕  
 斗 牛 女 虛 危 室 壁  
 右七宿配于東方  
 奎 婁 胃 昂 畢 觜 參  
 右七宿配于西方  
 井 鬼 柳 星 張 翼 軫  
 右七宿配于南方

右諸宿ノ像及ビ經緯度分等和漢ノ諸書ニ載スル  
 モノ多シ故ニ此ニ贅セス  
 支那ノ說ニ往昔天正冬至十一月朔子ノ正刻ニ當  
 リテ七曜悉ク虛ノ七度ニ次り南北ニ並列シテ直  
 線ヲナセリ故ニ虛ヲ正北トシテ方位ヲ設ケリト  
 云ヘリ衆星固ヨリ周旋スルガ故ニ固有ノ定位ア  
 ルヲナシトイヘ尺姑ク支那ニ從ヒテ四方ヲ分ツ  
 ノ三看ル人コレニ拘ルヲナカレ  
 凡ソ恒星ハ常ニ東行メ一歳ニ五十一秒ヲ進三七  
 十年ニメ一度ヲ差フ即チ歲故ニ往昔冬至ニ太陽  
 虛ニ次リシ者數千年ノ今ニ至リテハ箕ニ次レリ

觀象圖說

卷下

四一

觀象圖說

長崎大学附属図書館経済学部分館 武藤文庫所蔵



持リ冬至ノ三ナラズ其他二十餘氣十二宮等ノ諸  
點皆年々二十八宿ヲ逆行スルコトコレニ同ジ今第  
十圖ニ配スル者ハ今年ノ測定ニ據レリ七十年ノ  
後ニ至リテハ二十八宿悉ク一度ヲ進ニテ東ニ移  
ル故ニ春分ハ室ノ九度ニ至リ冬至ハ尾ノ十五度  
ニ移リ其他ノ節氣十二宮悉ク一度ヲ退キ二萬五  
千九百二十年即チ大年ニメ元宿ニ復スルナリ  
中星トハ當時正南ニアルノ星ヲ云フナリタトヘ  
バ第十圖ニ於テ地球白羊宮ニ次ル時自轉スレバ  
昏ニ天秤宮ハ西ニアリ磨羯宮ハ南ニアリテ此ニ

次ル所ノ星ヲ中星トシ白羊宮ハ東ニアリ他コレ  
ニ例ヒ第十之下圖ニテ當時ノ節氣ヲ得テ上圖ノ  
地球ヲ其方ニ在テ自轉セシムレバ二十八宿等ノ  
諸星時刻ニヨルノ所在方位ヲ知ルヲ掌ヲ指スガ  
如シ但此ニ云フ所ノ時刻ハ皆ナ平等ヲ用フベシ

恒星距離

西洋ノ人南刺獨列上好ノ測器ヲ以テ龍象星頭内  
ノ明星中線以北五十一度ヲ測ルニ吾地球ヲ距ル  
ノ年圈全徑ノ二十萬倍ナリト云ヘリ即チ三十二兆四千億里  
ニ當前ニモ云ヘル如ク凡ソ恒星各其体ノ大小光  
輝ノ多少齊シカラザルヲアレバ遠キモノ必ズ微

長崎大学附属図書館経済学部分館 武藤文庫所蔵



ナリト云フベカラズ近キモノ必ズ明ナリトスベ  
 カラズト雖此星最モ明亮ナル地球ヲ距ル  
 遠カラザルベキモノニシテ此ノ如シ今年圈全經  
 ラ假リニ一分トスル時ハ其距離二十丈ニ當ル故  
 ニ地球公運スルノ際北星ハ常ニ北極ヲ守リ其他  
 ノ恒星各其方位ヲ亂サミル者ハ一分ノ内ヲ往來  
 シテ二十丈ノ處ヲ見ルガ如キナレバ其差ヲ知ル  
 一能ハザルナリ第十圖中ニ地球ヨリ年圈ノ方位  
 ニ斜線ヲ引クモノハ圖狹少ナルガ故ニ已ムヲ  
 得ザルナリサテ太陽ト恒星ト同類ニシテ其相距  
 ル一此ノ如クナレバ太陽ト恒星トノ距離ハ大抵地球ト彗星頭内ノ明星ト

ニ距離 其恒星互ニ相距ル一モ亦大抵此ノ如クナ  
 ルベシコレニ因リテモ亦太虚ノ廣大ナルヲ察ス  
 ベキナリ

尾星

尾星漢名彗星又名彗星ハ一種ノ游星ニノ太陽ヲ旋回ス然  
 レ其行圈甚ダ長円ニノ十二宮ノ行次ニ據ラズ  
 太陽ハ其一方端ノ内ニアリ其一方ハ遠ク游星天  
 外ニ出ヅ故ニ尾星或時ハ來リテ太陽ニ密通シ水  
 星行圈ノ内ニ入り或時ハ去リテ游星天ノ外ニ出  
 ズ想フニ其恒星天ニ行ク時ハ必ズ其恒星ニ密通  
 スル一猶吾太陽ニ於テスルガ如クニメ恒星ト太

陽トヲ共ニ其圍ノ兩端内ニ容ル、ナルベシ祭端  
名ノ説ニ此星性甚ダ堅實ニノ油氣ヲ含ムト云へ  
リ故ニ來テ太陽ニ親シム時熱氣ニ焦燥セラレ其  
油熔解シテ焰狀ヲナシ毎ニ太陽ニ背キ蒸發シテ  
尾狀ヲナス此星固有ノ光輝ナク太陽ヲ假リテ其  
明ヲ發ス故ニ游星天内ニアレバ見ハレ出ヅレバ  
隱ル然レバ常ニ恒星天ヲ往來シテ曾テ吾游星天  
内ニ見ハレザルモノ其數幾億萬ナルヲシラズ  
但來テ吾太陽ヲ旋ルモノヲサヘ其數ヲ究ムル  
能ハザルナリ其行圍ノ所在長短濶狹各同ジカラ  
ズ其コレヲ一周スルコト少者數十年多キモノ數百

年ニ至ル然レバ皆テ游星天内ニ來ルノ際ニコレ  
ヲ見ルノミナル故古人コレヲ地上ニ屬スル流星  
ノ一種トシ或ハコレヲ以テ天災地變ノ候トセシ  
カ和漢ニ此説アリ後世ニ至リテコレヲ推歩スル  
ノ術ヲ得テ豫シメ其出没ノ年月及ビ方位等ヲ察  
シ今ハコレヲ天象ノ常トスルコトナレリ紀元一  
千七百八十二年即チ吾天明二年壬寅ニ至ルマデ  
ニ西洋ニテ記スルモノ二百星ニノ其六十八已ニ  
推歩ノ術ヲ得其他ノ一百四十八未ダ詳ナラズト  
云ヘリ今其詳ナルモノ三星ヲ採リテ第三圖ニ出  
ス其一ハ紀元一千六百六十一年即チ吾寛文元年

見  
四七  
觀  
線  
盤



辛丑ニ見ハル此星一百二十八年ニメ其行圈ヲ一周ス其二ハ紀元一千六百八十年即チ吾延寶八年庚申ニ見ハル五百七十五年ニメ一周ス其三ハ紀元一千六百八十二年即チ吾天和二年ニ見ハル七十六年ニメ一周ス法兒禮人曰其第三星ナル者行圈ヲ測ルニ其長ノ全徑一百一十二億零一百九十五萬一千七百里ナリ祭端人曰當年十二月八日其星太陽ニ密邇スルノ極ヲ測ルニ其熱スルヲ吾熱鉄ニ二千倍ス若シ地球大ニ齊シキ鉄丸ヲ造リコレヲ通紅ナラシメハ五萬年ヲ經テ冷ニ復スベシ然ルニ彼星ヲ測ルニ地球ヨリ大ナルヲ若干倍

ニノ五百七十五年ニメ太陽ニ會ヒ且其中間二百八十餘年ニメ一方ノ恒星ニ會ヒ共ニ其灼熱ヲ加フ故ニ曾テ其熱ヲ減スルノ徴ヲ見ズト云ヘリ

尾星品類

凡ソ尾星ノ品類太ダ多シ故ニ支那ニ彗星孛星等ノ名ヲ分子西洋ニ鬚星劍星等ノ名アリ又馬尾ニ象タルヲ毛星ト云フコレ皆其星体ニ異同アルト見ル所ノ遠近斜直トニ據リテ此別ヲナセリ辟々里由斯人ノ説ニ紀元一千六百五十二年即チ吾承應元年壬辰ニ當リテ見ル者六サ月ノ如シ但其光リ鈍クメ月ニ及バズト其他ハ大抵恒星ノ第一等



以定世人之眩惑矣其蘊真則有動論之在云于時文  
政癸未春日南臯尚貞題于觀象堂



*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

地動或問

觀象圖說附錄

或問西說ニ地ハ円球ニノ天中ニ懸レリトス實ニ  
然リヤ曰支那ノ梅勿菴地日可信ノ論ヲ作り其說  
初メテ西洋ヨリ傳フルニ非ラズ支那ノ賢哲既ニ  
往々コレヲ論ズル者アリ且其理確乎トノ更フベ  
カラザルヲ明ニス不佞淺學更ニ何ヲカ辨ズル  
ヲヲ待シヤ然レモ尚其證ノ一二ヲ云ハゞ月蝕ハ  
地影ニ據ルヲ世人ノ知ル所ナリ若シ地形円ナラ  
ザル時ハ何ゾ其影ノ円ナルヲ得シ又西洋ノ人  
航海ノ術ニ精シクノ常ニ地体ヲ周行シ其円形ヲ  
測定ノ製スル所ノ圖說多シ然レモコレヲ解スル

地動或問

觀象圖說



能ハスノ疑フ者アラバ近來吾東北ニ漂流ノ北  
方ノ氷海ニ臨ミ亞齊亞東北隅ノ地ニ上リ西ニ向  
ヒテ其北邊ヲ通り魯西亞ノ都ニ到リ之ヨリ船ニ  
乗リテ第那馬爾加ノ北岬ヲ過ギ暗又利亞ノ東邊  
海峽ヲ通り西南ニ向ヒテ南方ノ氷海ニ到リ南亞  
墨利加ノ南岬ヲ過ギ西北ニ向ヒテ大南洋ヲ渡リ  
歸朝スルモノアリコレ等ハ中線ヲ過ルコト兩回ニ  
ノ南北ノ氷海ヲ見西ニ向ヒテ東ニ出デ地球ヲ一  
周セルコト的實ナルヲ見テ理會スベシ又若シ地面  
平坦ナル時ハ北星ノ高低ヲ測ルニ一度ノ里數北  
地ハ少ク南地ハ多カルベキニ南北通シテ遠ヒナ

キ者ハ地形ノ円ナルニ非ズシテ何ゾヤ  
問地形球円ナラバ海水ハ瀧ノ如クニ下リ人畜地  
周ニ側立スル者雨ノ如クニ降ルコトアラシ又地球  
天中ニ懸ルト云フ時ハ之ヲ載スル物ナキニ何ゾ  
悠揚トシテ落ルコトナキヤ曰天ニ上下ナク只地ニ就  
テ其名ヲ分チ地心ヲ以テ下極トシ天頂ヲ以テ上  
トス凡ソ地上ノ萬物皆チ地心ニ親ミ到シトスル  
ノ性アリテコレガ爲メニ地面ニ附著セザルコトナ  
シコレヲ引カト云フ引カノ動論然レバ落ノ言  
タル元此地心ノ引カニ據リテ起ル者ニメ地球ノ  
外別ニ大引カアリテ引クニアラスバ何ゾ一羽ト

地球成問

二 一 觀 後 堂

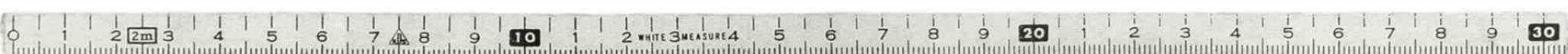


雖氏地ヲ離レテ他ニ向フコアラシク況ヤ此大地球  
何物ト相引テ他ニ親ニ落ルコノアルベキヤハ  
或問太陰及ビ一切游星ハ悉皆世界トシ恒星ヲ太  
陽ト同類ナリトスルハ何ノ故ゾヤ曰望遠鏡ヲ以  
テ太陰中ナル山海ヲ視テ世界タルコヲ知リ内游  
星ノ盈虚ヲ窺テ太陰ト同体ナルコヲ察シ心游術  
ヲ以テ七曜ヲ經歷シ互ニ相省テ地モ亦一游星ニ  
メ太陽モ亦恒星タルコヲ辨ズ詳ナルコハ既ニ正  
編ニ出セリ

金火二星ノ間ニアリ五星悉ク太陽ヲ心トメ旋回  
スルニ何ゾ地球持リ不動ニメ太陽五星ヲ卒ヒテ  
コレヲ旋回スルノ理アラン  
或問地球自轉公運等ノ動アラバ常ニ震揺シテ止  
マザルベキニ然ラザルハ何ゾヤ曰柳圃先生曆象  
新書中之ヲ辨ズルコ甚ダ詳密ナリ其説ニ云フ車  
馬航船ノ人ヲノ寢食ヲ安ンゼザラシムル者ハ風  
浪嶮坂其行ヲ遮リ其動ヲ純一ナラシメザルニ據  
ル昔時後醍醐天皇ノ御宇ニ當リテ塩谷判官高  
貞龍馬ヲ奉ル其馬駿足不凡ニメ卯ノ刺ニ出雲ノ  
畠田ヲ出テ酉ノ刺ニ京著ス其行程七十餘里ナル

地動或問

三 現 泉 堂



動ノ不覺レ凡  
旋風面不覺者  
ハ今地動也亦不  
ハ何ノ不覺ヤ

雲霧東西南北  
心不覺地氣者  
非地動之例也

ニ鞍上静カリノ徒ラニ坐スルガ如シ但旋風面ヲ  
撲ツニ堪ヘズト奏シタリコレ馬ト人ト其動ヲ同  
クスルガ故ニ人其動ヲ覺ヘサルナリ地球ノ運轉  
ニ至リテハ龍馬ノ比ニアラス上ニメハ雲霧飛鳥  
彈丸ノ類中ニメハ人畜草木下ニメハ河海魚鼈悉  
皆一致ニメ其動ヲ同一ニシ毫髪ノ遲速ナキガ故  
ニ人コレヲ覺知スルヲ得ザルナリト  
或問地ト萬物ト其動ヲ同一ニスルガ故ニ人コレ  
ヲ覺ヘザルヲハ聞ケリ然ルニ其静カナル太陽ヲ  
見ルニ反テ左右兩旋ノ動アルハ何ノ故ゾヤ曰一  
体ハ静ヲナシ兩体ハ動ヲナシ動々静々共ニコレ

静々動々静共ニコレ動々ハ静ニ異ナラス静ハ動  
ニ異ナラス動即是静静即チコレ動ト云ヘリ彼出  
雲國ヨリ奉リシ龍馬ト人ト一体トナリテ行ク時  
ハコレヲ動々トシ止ル時ハ静々トス然レ凡其人  
ニアリテハ行止共ニ覺知セザレバコレヲ静トス  
コレ一体ナレバナリ人馬ハ行キ風ハ止ル爰ニ於  
テ初メテ兩体トナルニ至リテ旋風面ヲ撲ツノ動  
ヲ覺ユ人ニ據リテ見レバ吾静ナルニ彼風來リテ  
面ヲ撲チ風ニ據リテ見レバ吾静ナルニ彼人面來  
リテ風ヲ撲ツ然レバ動ハ常ニ彼ニアリ静ハ常ニ  
吾ニアリ動静ハ只彼我ノ分ツ所以ニメ本來異ナ

地動義明

觀泉堂

二切作爲形或而  
非堅實者也  
俗如幻即如  
別皆是凡夫非  
知六合外故負  
不見如長切是見  
日神倭見不見  
且海若戶所他工  
不知不知

ル所ナシ地ニアリテ太陽ヲ望メバ彼レ來リテ地  
ヲ回ル太陽ニアリテ地ヲ見レバ地來リテ我ヲ回  
ルコレ皆所謂視動ノ致ス所ナリ  
或問地動ヲ以テ是トスル時ハ古來地不動ヲ説ク  
モノハ非カ曰凡ソ究理ノ學ハ視動ニ據リテ實動  
ヲ察シ再ビ視動ニ復リテ用ヲナス地ヲ不動ト云  
フ者ハ視動ニノ其用ヲ説キ地動ヲ云フ者ハ實動  
ニノ其理ヲ明ニス理ヲ明ニスル者ハ用ヲ利セン  
ガ爲ニメ用ヲ利セントスルモノハ先ヅ其理ヲ明  
ニス兩者全クシテ後其本真ヲ得タリト云フベシ  
何ゾ一方ヲ擧ゲテ是非ヲ論スルヲ得ン

或問支那ト西洋ト究理ノ法同ジカラス何ヲ是ト  
スベキヤ曰支那ハ氣ニ通シ西洋ハ物ニ達ス凡ソ  
天文ヲ觀測器ヲ製シ人身ヲ解剖ノ疾病ノ由ヲ探  
リ地理ヲ察メ稼植ヲ示シ船舶ノ術ヲ精クノ海外  
ヲ究メ人ノ耳目ヲ殆ンド無究ニ游バシムルハ  
西洋ノ能トス太極兩儀ノ論ヲ設ケ象數ヲ究メ易  
ヲ作り居ラニメ鬼神ニ通スルハ支那ノ能トスサ  
レバ柳圃先生ハ地谷剌白爾ガ骨髓ヲ究メ奈端啓  
兒ガ心裡ニ入り曆象新書ヲ著スニ及ビテ易ヲ學  
ブニ非ズバ造化ノ妙ヲ究ルヲ能ハザルベシト云  
ヘリ豈淺學ノ徒輕ク之ヲ臧否スルヲ得ンヤ

地動或問

一見

或問易ニ乾ヲ天トシ坤ヲ地トシ乾ヲ陽トシ動トシ坤ヲ陰トシ靜トスル者ハ西洋ノ地動ト相戾ルニ非ズヤ曰易ハト筮ノ爲ニ設ル所ニメ吉凶悔吝ノ情ヲ盡シ視動ヲ主トメ之ヲ説ケリ孔子曰天之德ハ円ニメ地之德ハ方ナリト此ニ方円ヲ云フ者ハ形ニ非スメ德ヲ云フ今山澤草木ノ靜ナルヲ視テ之ヲ陰トシ日月星辰ノ動クヲ視テ之ヲ陽トス若シ月中ニアリテ易ヲ説カバ月ヲ靜トシ陰トシ地ヲ動トシ陽トスルナルベシ凡ソ吉凶悔吝ハ人間彼我ノ間事ニ觸レ物ニ應メ起ル所ノ視動ニメ鬼神ニ據リテ之ヲ見レバ吉凶ノ分ナカルベシ學

者視實兩動ヲ得ル時ハ自ラ其別ヲ知ルニ至ラン或問地動ノ説聖經ニ戾ルヲナクバ支那ノ人既ニ西洋ノ推測ヲ信ジ反テ地動ヲ喜バザルハ何ノ故ゾヤ曰已レニ從フ是好ミ己レニ異ナレバ則惡ム者ハ世人ノ情ナリ初メ西洋ニテ龐迪我刺私此學ヲ講ゼシ時衆人一般ニ之ヲ疑ヒシガ後ニ至リテ特リ地谷コレヲ信ゼシカ氏遽ニ其説ヲ公ニスルヲ能ハズ假リニ布多録某斯ト龐迪我刺私ノ二圖ヲ折中シテ地不動ヲ説キナガラ五星ノ太陽ヲ旋回スルヲ論シ漸ク人心一轉スルノ後ニ至リテ刺白爾其實ヲ發シテ地動ヲ唱ヘ西洋一般其説ヲ

疑フ者ナキニ至レリ其學已ニ支那ニ入ルト雖氏  
其俗古傳ヲ改ムルヲ厭フノ風アリテ假令ヒ二  
三ノ學者其理ニ達シタリ氏遠ニ通國ノ舊習ヲ一  
掃スルヲ能ハズ且曆ヲ作り民時ヲ授ルニ於テハ  
皆ナ視動ヲ用フルトニソ實動ノ論ニ至リテハ初  
學ノ急ニ非ルガ故ニ強テコレニ及バズト見エタ  
リ然レ氏後世ニ至リ實動ヲ説クコトアラバ支那ト  
雖氏地動ヲ外ニシテ何ヲカ云フコトアララン

觀象圖說附錄地動或問終

漢土上古黃帝雲師重黎掌天陶  
唐氏敬授人時是天官曆數之所  
創起也史遷之書載星術風雲之  
占徒占物怪以合時應何足以徵  
哉自此而後諸家所推測一非一  
是一得一失至明乃始傳泰西之  
學彼土人大有所發明我  
皇國百年来亦從事於此豪傑之



士輩出焉。而鏘鏘蕙蕙其中者。我  
南阜先生也。先生多譯舶齋書。摘  
其華。選其粹。著觀象圖說。此書也。  
地動實測之要法。而漢人所未能  
談者也。而世學者多溺漢人之說。  
不能自拔。信疑相半。豈不大遺恨  
乎。雖然。欲令天下風靡之士。遽奪  
其終身之見。廻向於我。噫。亦難矣。

是先生之所以下筆不休也。如或  
有豪傑之士。與我同志者。苟令千  
歲之日。至可坐而致。乃是執鞭於  
雲師。而不為星占之徒者乎。先生  
長崎之人。姓吉雄氏。名某。字伯元。  
耕牛先生之孫。如及先生之子。今  
住尾張。名聲藉甚。他日著書。繼繼  
出於人間。諸弟子遲之。

618

文政六年癸未至日

濱松藩高津豫謹識



尾張

杉山延

書



四二四

### 三都

### 書肆

京都寺町通松原下

同三條通升屋町

江戸日本橋通二丁目

同二丁目

同淺草茅町二丁目

同芝神明前

同日本橋通二丁目

尾州名古屋本町七丁目

大坂心齋橋通安堂寺町

同北久太郎町

同安土町北

勝村治右衛門

出雲寺文次郎

須原屋茂兵衛

須原屋新兵衛

須原屋伊八

岡田屋嘉七

山城屋佐兵衛

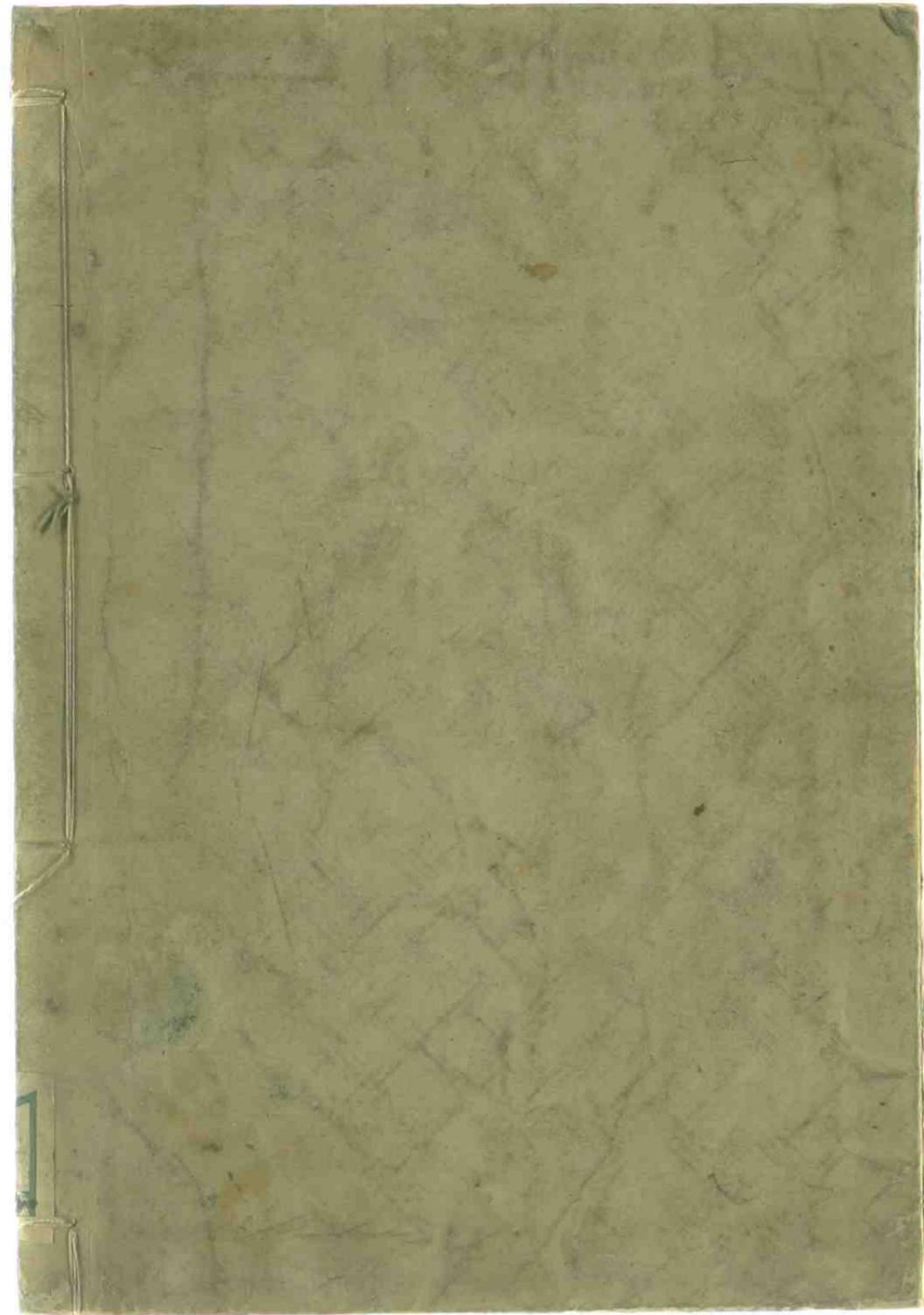
永樂屋東四郎

秋田屋太左門

河内屋喜兵衛

加賀屋善藏板





長崎大学附属図書館経済学部分館 武藤文庫所蔵

